

三善清行「詰眼文」考

矢 作 武

延喜期の鴻儒三善清行に「詰眼文」という一文がある。小稿はその由来と意義について一考しようとするものである。

「詰眼文」(『本朝文粹』巻十二・『政事要略』巻九十五・『朝野群載』巻一所収)は、

延喜十三年冬、余年六十七、心未耄乱、眼已昏朦。雖文有所屬、而筆不能書。遂作詰眼文、抽叙其志云爾。

という序によれば、清行の六十七歳、「意見封事十二箇条」を書く数か月前に、老眼の視力が衰弱して筆記することもできなくなつたという感懐を記したものである。内容は、心の神と眼の神とを擬人化して対話させ、心が視力衰弱した眼を語るというものである。

第一段、心の神が眼の神をなじつていうには、心は身の王であり、眼は心の佐である、王事は大切であり、輔佐は動めなければならぬのに、きみはものうげに眠りばかり多く、機能を發揮してくれぬ、小字の書物を見ることができず、陽の光を弁別することもできぬ、きみが怠けて勤めをいとうのか、それとも主人のわたしが愚かだから助けるに足らぬというのか、きみとは出処進退を

同じくすること六十余年、形は君臣の間といっても心は兄弟のやうなものではないか、わたしの業とするものは文であり、文の資とするところは眼である。わたしをこのような下積みの境涯に置き、放浪の悲しみにくれさせるのは、きみの不明不忠のせいではないのかと。第二段、眼の神はそれを聞いてはらはらと涙を流し、頭を下げていうことには、ああ何と情ないことを仰せられる昔あなたはこうおっしゃつた。わたしはきみの光をかり、明を用いて学問の奥意を究め、高位高官に昇りたい、古語に、いやしくも経学に明らかならば、公卿の位を取ること、俯して地上の芥を拾うがごとし、とある。わたしはいつもこの言葉を心にかけて忘れないのだ。きみもどうかわたしについてきてくれと、わたくしはそのお心に従つて、一心に勤めに励み、灯火に腫をいぶされるのも忘れ、雪の光をたよつてまつげにつららのできるのも忍んで労を取つてきました。内には飢え困窮を重ねて精気を失ない、外には寒風を犯して視力漸く衰えました。今はどんなに苦勞をしても、先にいつてあなたが富貴となつた時、楽しいめにあえるのだと自らいいきかせてまいりました。しかるにあなたは、いたずら

に篤実の性を守って世渡りは拙劣、他の方のように卿相の館へおもむいて才名をてらうこともできず、近臣権門に媚びてその推薦を得ることもできない。ただ貧困に甘んじて古人糟粕の遺書をもてあそぶばかり、今やあなたは年老い、わたくしも困窮しております。あなたの憂いの火は内に燃え尽して灰となり、悲しみの涙は两眼より流れてわたくしの瞳は溺れております。この期に及んでなおわたくしの不明の眼を責めて何となりましょう。またあなたを輔佐するものはわたくしだけではありません。手はふるえ、足はなえ、耳は遠く、歯はぐらぐら、どうしてわたくし一人が責められましょう。どうかよくお考え下さいと。第三段、心の神は度を失って謝つていうには、では一体どうしたらよからうかと。第四段、眼の神はいう、今は学問を廢して仏門にお入りなさい、わたくしも臉を合わせて仏の光を見ましようと。第五段、いい終らぬ内に、心の神は起って礼拝していう。ありがたいお教え、決して忘れないたいと。

以上のような内容を持つ作品であるが、柿村重松氏の『本朝文粹註釈』（大正十一年刊）は、個々の語句の典故を指摘するにとどまり、作品の評価には及んでいない。川口久雄氏は『平安朝日本漢文学史の研究』（昭和三十四年刊）の中で「詰眼文は一種の戯作的な作品、（中略）老眼の視力が衰弱して筆でもの書くこともかなわなくなった感懷を、眼の神と心の神とを擬人化して対話させる一種の『茶酒論』式擬人物語のしたてのなかに寓する。」ものと述べられ、「世渡り下手だというにがい自嘲のなかに、学問を重んじなくなった延喜の社会風潮に対して一種の皮肉と諷刺

をこめるあきらめにちかいベীソスにみちた老年の心境が、かるいユーモアをまじえて告白される、世の中のはげしい動きと歩調があいかなる学者文人のはえましい自画像であって、忠臣の『見叩頭虫詩』や順の『無尾牛歌』の自嘲的な作品の系列につながるもの、四六駢體の文体ながら不思議な自由さが流れて、掬すべき蒼古の味わいがある。文選の賦や陶潜の『形影神』やさらには茶酒論式の唐代民間歌賦などの形式の遠いこたまであろう。」といわれる。また所功氏は『三善清行』（昭和四十五年十月刊）の中で「詰眼文は、心と眼を擬人的に対話させながら、自伝を回想した軽妙な隨筆である。（中略）世渡りの下手な学者文人は、貧乏ぐらしに甘んじなければならなかったことを自嘲し、（中略）もちろんこの自嘲を文字どおり受け取ることではない。むしろ清行が、進んで道真や朝廷に辛酉革命の論をたてまつり、また時平に媚びて道真を『惡逆の主』と断言したことは、前述の通りである。ただし、道真追放に協力して一挙に文人的地位を確立したものの、その官位昇進には限度があった。すなわち、延喜五年式部少輔より權大輔になったが、大輔のポストには、藤原氏の菅根・興範・清貫らが次々に入り、清行は十年ちかく權大輔の地位に足ふみせねばならなかった。良吏の典型を示す『藤原保則伝』を著わし、延喜格式の編纂に力を尽くしても、その功績は、何ら具体的に報いられなかったのである。右の文（略）中にも、楊子雲と杜伯山の故事を引き、清行が文章を書けば却って世人の嘲を受け、その文才も時務に役立てられないと述べている。これは、おそらく彼のような文人官吏を重んじない当時の政治社会に対す

る不満と批判のあらわれであろう。しかも、十年ちかい官位の滞滯は、そうした社会矛盾の根元を冷静にみとめる機会を清行に与えたにちがいない。」と評されている。

まず川口氏のいわれる「文選の賦」とは、同書の空海の「雙誓指帰」について述べておられる所で引く岡田正之氏の「文章の結構は全く司馬相如の子虚・上林賦に倣ひたるもの」(『日本漢文学史』)に見える司馬相如の子虚賦・上林賦を指しておられるようである。また「茶酒論式の唐代民間歌賦」とは、同じ所で「散文が一部に脚韻をふんだり、平仄をとのえたりしながら、四六駢儷のきらびやかさをもつて組みたてられ、部分的に韻文の偏頗などをはさみ、問答形式で叙述を展開する」という点で、雙誓指帰には多分に変文に似ている要素を指摘することができる。しかしもちろん今日われわれに知られている敦煌変文のジャンルそのものではなく、相当に距離のあることも否みえない。ただし通俗性をもった賦の形式である点は韓朋賦などに類似性があり、ことに架空人物を設定して一応の戯曲の構成のもとに對話問答によって叙述をすすめる点で、燕子賦や茶酒論のごとき変文的な俗体の戯賦のごときものとすこぶる近い性質をもつ。」といわれるところから、敦煌遺文の「茶酒論」「燕子賦」を指しておられるようである。「詰眼文」がそれらの作品の「形式の遠いこだま」であろうといわれるのは、思うに、問答形式で叙述を展開する点、ことに架空人物を設定して一応の戯曲の構成のもとに對話問答によって叙述をすすめる点によるのであろう。司馬相如の賦には子虚・亡是公・烏有先生という三人の架空人物が登場する。「茶酒論」も、

茶と酒とを擬人化しておたがい優劣を論争し、最後に水が登場して仲裁するというものである。「燕子賦」も燕と雀の問答のところへ鳳凰が登場して終結する。淵明の「形影神」は文字通り形と影と神との三者がそれぞれの立場を述べる一組三首の詩である。すなわち、これらの作品に共通している点は、すべて三人の登場人物があらわれるということである。立場を異にする二者が論争し最後に第三者が超越的に判定するか、仲裁するといった構成になっている。それに対して「詰眼文」が形式の面において根本的に異なる点は、心の神と眼の神の二者しか登場しないことである。また、優劣を競い合うといった内容のものではないということである。また所氏が、「詰眼文」は清行の「十年ちかく權大輔の地位に足ふみせねばならなかった」時期の作であるといわれる点は、極めて示唆に富む御指摘であると思われるが、「輕妙な隨筆」であると規定されるのは如何がであらうか。

筆者は清行が何故「詰眼文」を書いたかを述べる前に、彼に直接影響を与えたものと思われる先行作品を挙げてみよう。それは中国六朝宋の劉義慶著、梁の劉孝標注『世說新語』の注所引の一文である。排調篇第七話の注に引く張敏集に載するところの「頭責子羽文」である。序文に、

余友有秦生者。雖有姊夫之尊、少而狎焉。同時好昵、有太原溫長仁顯、潁川荀景伯寓、范陽張茂先華、士卿劉文生許、南陽鄭潤甫湛、河南鄭思淵詡。數年之中、繼踵登朝。而此賢身処陋巷、屢沽而無善價、允志自若、終不衰墮、為之慨然。又怪諸賢既已在位。曾無伐木嘒鳴之聲、甚違王貢彈冠之義。

故因秦生容貌之盛、為頭責之文以戲之、并以嘲六子焉。雖似諸謔、実有興也。

とある。友人に秦生というものがいて、義兄にあたるが若い頃から狎れ親んでいる。彼の友人には張華・荀寓ら六人があり、次々と出世していったが、この仁だけはいままでたつてもうだが上からず、気位ばかり旺盛であつた。そこで彼の容貌だけは立派なことによつて、頭が責める文を作り、秦生をなぶるかたがた、六人をも嘲けろうというのである。その文にいう。第一段、

維泰始元年、頭責子羽曰、吾託子為頭、万有余日矣。大塊稟我以精、造我以形。我為子植髮膚、置鼻耳、安眉須、挿牙齒、眸子擡光、双顧隆起。每至出入之間、遨遊市里、行者辟易、坐者竦蹠、或稱君侯、或言將軍、捧手傾側、佇立崎嶇。如此者、故我形之足偉也。子冠星不戴、金銀不佩。釵以当笄、衿以代幘、旨味弗嘗、食粟茹菜、隈摧園間、糞壤汚黑、歲莫年過、曾不自悔。子厭我於形容、我賤子乎意態。若此者乎、必子行己之累也。子遇我如讐、我視子如仇。居常不樂、兩者俱憂。何其鄙哉。子欲為入宝也、則当如畢陶后稷、巫咸伊陟、保父王家、永見封殖。子欲為名高也、則当如許由子威、卞隨務光、洗耳逃禄、千歲流芳。子欲為遊說也、則当如陳軫劇通、陸生鄧公、軋禍為福、令辭從容。子欲進趨也、則当如賈生之求試、終軍之請使、砥礪鋒穎、以幹王事。子欲為恬淡也、則当如老聃之守一、莊周之自逸、廓然離欲、志陵雲日、子欲為隱遁也、則当采期之帶索、漁父之澹澹、棲遲神丘、垂餌巨壑。此一介之所以顯身成名者也。今子上不希道

德、中不効儒墨、塊然窮賤、守此愚惑。察子之情、觀子之志、退不為於処士、進無望於三事、而徒翫日勞形、習為常人之所喜、不亦過乎。

泰始元年のこと、頭が子羽を責めていうことには、わたしは頭としてあなたに身を寄せて一万日あまりになります。わたしはあなたのために髪、皮膚、鼻や耳、齒、眉、ひげをしつらえ、眸には光をとらえ阿の頬骨は隆起させました。街中に出れば人々はあなたを君侯將軍と見まちがえて身を避けるほどです。それはみなわたしの姿が立派だからです。なのにあなたは冠を載せてもくれないし、金銀飾りも身につけない。美味を食わず粗衣粗食、田舎にひっこんだまま糞土にまみれてまっ黒、いたずらに年月は過ぎて行くのにまるで後悔もしない、こうしてあなたはわたしに自分の姿をうんざりさせ、あなたの気持態度を輕蔑するようになったのです。こうなったのは、きつとあなたの生き方に誤りがあったからです。あなたはわたしを敵のようにあしらひ、わたしもあなたを仇視するといった毎日で、お互いに悲しい限りです。あなたは人に重用されたいと思うなら、かの畢陶や后稷・伊陟・巫咸が王室を安んじ永く封土を賜ったようにすべきであり、功名をたてようとおもうなら、許由・子威・卞隨・務光が耳を洗って利禄を逃れ、千年後に芳名を流したようにすべきであり、遊說をして世に容れられようとするならば、陳軫・劇通・陸生・鄧公らが禍を転じて福となし、美辭を自由にあやつたようにすべきであり、進んで一事を成就させたいのなら、賈誼がとめて建策を試み、終軍が南越に使を請うたみないに鋒を砥いで王事にあたるべきであ

る。また無欲恬淡を生きたいのならば老荘のごとく一を守り世俗を離れて志を雲日より高くすべきであり、隱棲を逃げようと思ふならば榮啓期や漁父のごとく、なわを帯にして神丘にかくれ住んだり、水中の魚のように自由に、餌を深い谷川に垂れたようにすべきである。これが世に自ら存在を顯し、名をたてる道なのである。ところがあなたは老荘の道もねがわなければ、儒墨の道求めもせず、ただぼんやりと貧困に甘んじ馬鹿を守りきつてゐる。あなたの志を察すると、退いては処士の立場を守りぬくというのでもなく、進んでは三公などの高位にのぼり經世にあたろうというのでもなく、いたずらに毎日を飯び、身体を苦しめ、情性のままに凡愚の好むようなことをしている。これはやはり間違つてゐるのではなからうか、と。第二段、

於是、子羽愀然深念而対曰、凡所教敎、謹聞命矣。以受性拘係、不開礼義、設以天幸為子所寄。今欲使吾為忠也、即当如伍胥屈平。欲使吾為信也、則当殺身以成名。欲使吾為介節邪、則当赴水火以全貞。此四者人之所忌。故吾不敢造意。

そこで子羽はかなしげに顔色を変え、深く考えこみながら答えていうには、お教えいただいたことはありがたくうかがいました。性を受けたはじめから礼儀をかわすいとまもなく、たまたまあなたが身を寄せられるところとなった。だがいまわたしに忠義を尽くさせようとするならば、伍子胥や屈原のようにしなければならず、信義を尽くさせようとするならば、身を殺して名を立てねばならぬし、徳操を逃げさせようとするならば、水火に身を投げて、貞心を全うしなければならぬ、だがこの四つの件は人の嫌

がることでして、進んでやる気はしないのです、と。第三段、

頭曰、子所謂天刑・地網・剛徳之尤。不登山抱木、則襄裳赴流。吾欲告爾以養性、誨爾以優游、而以蟻蝨同情、不聽我謀。悲哉。俱寓人体而独為子頭、且擬人其倫。喻子儕偶、子不如太原温顯。潁川荀寓、范陽張華、士卿劉許、南陽鄒湛、河南鄭詡。此數子者、或嘗喫無宮商、或厓陋希言語、或淹伊多姿態、或謹諱少智諳、或口如含膠飴、或頭巾蠶杆。而猶文采可觀、意思詳序。攀竜附鳳、並登天府。夫舐痔得車、沈淵得珠、豈若夫子、徒令唇舌腐爛、手足沾濡哉。居有事之世、而恥為權宦、譬猶鑿池抱甕、難以求富。嗟乎、子羽何異檻中之熊、深葬之虎、石間飢蟹、寶中之鼠。事力雖勤、見功甚苦。宜其拳局剪髮、至老無所希也。支離其形、猶能不困、非命也夫。豈与夫子同処也。

頭がいうには、あなたは、いわゆる天にも地にも罰せられると云つたであ、剛徳の最たるものです。あなたに養性や世情に合わせて進む道を教えてやろうと思つてゐるのに、蝨のようなけちな料見でわたしの考えを聞こうともしない。悲しいことです、いっしょに人体にやどり、あなたの頭となつてしばらくは友達同志となつたのに、あなたを仲間達と較べると、范陽の張華等六人にもあなたは及ばないのだ。彼等は、あるものほどもりで音痴、あるいは病弱で弁才乏しく、あるいは立ち居ふるまいがきちこなく身振り過剰、あるいは騒々しく愚かで、あるいは飴を口に入れてしゃべるような話しぶりの者達である。それでもなお文章はしっかりしていて論理だつてゐる。そして竜にしがみつきの鳳にとりす

がって天府にまで登っている。そもそも秦王の痔を齧めて五乗の車を得た医者の話や、淵に身を投げ珠を得た人のようなことはやっております。どうしてあなたみたいにならずに唇舌を腐らせ、手足を濡らすだけでよろしいのでしょうか。この有事の世で事を図ることを恥じるのは、まるで池を堀りながらかめで水を田に運ぶようなもので、富貴は求められません。ああ、あなたはどろして檻の中の熊、おとし穴の中の虎、石の間にはさまって飢えた蟹、穴の中の鼠と異なりまじょうか。勤めはげんでみても成功もせず、老いさらばえてうだつが上がらないのも当然です。このうえはどうしてあなたなどと付き合っておられまじょうか、と。

以上のような内容であるが、これを清行の「詰眼文」と比較して見ると、先ず、共に同じく「文」という形式をとっている事、また、眼と心とが対する点は、頭が本人に対する点に一致している事、また両方とも二者のみ登場するという事等、形式、内容ともに両者の関係は深いようである。また文章語句の面でも、例えば、「詰眼文」の、

君性懷敦龐、志乖功宦、進不能趨卿相之館、衍其才名、退不能媚奧竈之人、求其推薦。

は、「頭責子羽文」の、

察子之情、觀子之志、退不為処士、進無望於三事。

と近似しているし、前者の引用文につづく、

徒居白屋之中、守素王之余業、嘗以簞瓢之食、甃糟粕之遺文。

は、後者の引用文につづく、

而徒、翫日勞形、習為常人之所喜。

を用いたのであろう。また前者の

於是眼神聰命、淚下數行。即頓首謝云。

於是心神惘惘失度、逡巡思過、謝云（中略）敬承箴誨、請以書紳。

は、後者の、

於是子羽愀然深念而對曰、凡所教勸、謹聞命矣。

に直接惹かれて書いたのではあろうが、この部分は彼我ともに「文選」の司馬相如「上林賦」の最後の部分、

於是二子愀然改容、超若自失、逡巡避席、曰、鄙人固陋、

不知忌諱、乃今日見教、謹受命矣。

に拠っているようである。また「詰眼文」の

昔与卿同胞而生育、今与卿合体而行藏、相共周旋、漸六十余歲。同欲婦老近二三許年。義雖君臣、恩猶兄弟。

は「頭責子羽文」の

吾託子為頭、万有余日矣。（中略）俱寓人体而独為子頭、

且擬人其倫。

を言いかえたのであろう。また前者で「伊尹は君を堯舜に致さんことを求め、陶唐は臣を堯舜に得るを樂ぶ。蕭相暫く辭して、漢皇手臂の便を失なひ、孔明節を尽くして蜀主魚水の功を成せり。」と功臣の例を挙げているが、後者も前述の如く卓陶・后稷・王威・伊陟・賈誼・終軍等の例を引いている。

以上の如く、「詰眼文」と「頭責子羽文」の類似することは明らかであるが、では清行と『世説』との関わりは如何がであらう

か。『江談抄』巻五によれば、紀長谷雄と共に『世説』の累代の難義を釈して『世説私記』というものを作ったという。清行が「無才の博士はわぬしより始まる」と罵倒したといわれる長谷雄と仲良く共著したということはわかには信じ難いが、彼が『世説私記』を作ったというのは恐らく事実であろう。清行晩年の著『善家異記』の佚文「巫覡見鬼有徴驗記」(『政事要略』巻七十)の最後で、

此事雖迂誕、自所視、聊以記之、恐後代以余為鬼之重狐焉。といっているのは、『世説』排調篇第十九話の、

干宝向劉真長叙其搜神記、劉曰、卿可謂鬼之重狐。

によるのであろう。また『藤原保則伝』の最後で、

蔡伯喈作郭泰碑、遂無慙德。

と述べているのは、『世説』德行篇第三話の注によったのであろう。すなわち現行の『世説』注所引『統漢書』には、

蔡伯喈為作碑、曰、吾為人作銘、未嘗不有慙容。唯為郭有道碑頌、無愧耳。

とあるが、『太平広記』巻一三九所引『世説』では、

蔡伯喈(中略)曰、吾為天下作碑銘多矣。未嘗不有慙德。

唯郭有道先生碑頌、無愧色耳。

となっており、『世説』に拠ったと思われる。同じく、

瓜葛之儀、君亦可悉。

という句があるが、これも『世説』排調篇第十六話の、

王長予幼便和令、丞相愛恣甚篤。每共囲碁、丞相欲舉行、長予按指不聽。丞相笑曰、詎得爾、相与似有瓜葛。(蘇曰、瓜葛疎親也。)

に拠ったのであろう。同じく『保則伝』で、

又扱士採才、有知人之鑒。昔在備中時、小野葛絃、年少為掾。公称曰、若必當為天下循良之吏。又在讃岐時、菅原朝臣代公為守。公竊語云、新太守当今碩儒、非吾所測知也。但見其内志、誠是危殆之士也。後皆如其語。

といい、識鑒の記述があるが、識鑒・賞譽・人物評は『世説』の最も大きな話柄の一つであって、この道真評を坂本太郎氏が『菅原道真』の中で、清行自身の感想とみるべき公算が大きいといわれるのは、恐らくその通りであろう。『世説』の内容から思いついて創作した話であろう。また所氏は『保則伝』の表現について、独白体と問答形式という特色に注目されているが、これも世説の記述の表現と無関係ではないであろう。

以上によって、清行が『世説新語』注所引の「頭責子羽文」の影響を受けて「詰眼文」を書いたことはほぼ明らかとなった。

(以下続稿・未完)